

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 13 日現在

機関番号：32601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720291

研究課題名(和文) 英語科教員養成における電子ティーチング・ポートフォリオの活用

研究課題名(英文) Use of Teaching Portfolio in Pre-seervice English Teacher Program

研究代表者

高木 亜希子 (TAKAGI, Akiko)

青山学院大学・教育人間科学部・准教授

研究者番号：50343629

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円、(間接経費) 630,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、私立大学における英語科教員養成プログラムの英語科教育法特論の授業で行われた。英語科の教職免許取得希望者にとって必修の授業であり、1年間の週1回の授業であった。受講者は1年間にわたって、ポートフォリオを使用することと、毎週授業で学んだことを電子掲示板に投稿することが求められた。研究の結果、ポートフォリオとジャーナルを使用することで、学習者の視点から過去の学習経験を振り返り、理論と実践を統合することができた。また、教師の視点から振り返ることで、未来の教えるイメージを視覚化することができた。要約すれば、授業における絶え間ない振り返りが教職課程の学生の成長に寄与した。

研究成果の概要(英文)：The study was conducted in a methodology course on teaching English as a foreign language in pre-service teacher education program at a private university. The course was a requirement for students seeking an English teacher's license. The class met once per week for two semesters over the course of a year. They were required to use a teaching portfolio over the course. In addition, each week, the students were asked to submit a reflection journal to an electronic discussion board to reflect on what they learned in class. The results showed that using teaching portfolios and weekly journals, the students integrated theory and practice by reflecting on their own past learning experiences from a learner's viewpoint and visualized their future image of teaching based on reflecting from a teacher's perspective. In summary, constant reflection on the course helped the student teachers professional development.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学、外国語教育

キーワード：教員養成 省察 ポートフォリオ

1. 研究開始当初の背景

近年、教育学の分野では、教師が省察することの重要性が認識され、この10年で反省的实践(reflective practice)という用語が広く使われるようになった(瀬川・福本, 2006)。日本教育大学協会(2004, 2006)も、教員養成カリキュラムにおける省察の重要性を指摘しており、体験や省察を組み込んだ科目の充実を推進している。このような動向は英語科教員養成にも見られ、JACET 教育問題研究会(2009)の調査によれば、全国の大学の101名の英語科教育法の担当者のうち、90%が模擬授業を取り入れ、40%が模擬授業を録画することで学生の自己評価と省察を促している。

研究者は2009年度まで国立大学法人の教員養成課程に勤務していた。ここでは、教職関連科目のクラスあたりの履修者は少人数で、きめ細やかな指導が行いやすく、対面で省察を十分に促す教育が実践できた。2010年度から担当している私立大学の英語科教職課程の授業では、履修者の人数が多く、指導が行き届きにくい。しかしながら、多人数であっても、従来の知識伝達アプローチではなく、社会構成主義的アプローチのほうが、教師の成長に有効であると考えられる。そこで、電子ティーチング・ポートフォリオ及び電子掲示板を活用し、授業外でも履修者同士がオンライン上で活発に交流し、交流に基づいて省察する機会を増やすことは、履修者の英語教師としての成長に寄与し、養成課程で到達すべき教師の資質能力の保証につながると考え、本研究の着想に至った。また、私立大学の英語科教職課程の履修者を対象として、ティーチング・ポートフォリオを活用した研究は、ほとんど行われていないため、研究意義があると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、省察を核とした英語科教職課程の授業プログラムを開発し、英語科教員養成のあり方を改善することを目的とした。オンライン上の電子ティーチング・ポートフォリオと電子掲示板を活用することによって、履修者同士が授業内だけでなく授業外でも活発に交流を図り、交流に基づいて省察する機会を十分に与えることが可能となった。本研究では、英語科教職課程に適した電子ティーチング・ポートフォリオの内容、様式、評価方法を開発し、一定期間実際に運用した上で、プログラムの有用性を検証した。同時に、履修者の英語教師としての成長の軌跡を明らかにした。

3. 研究の方法

(1) 3年間の研究方法

1年目は、他大学及び海外の教員養成課程におけるティーチング・ポートフォリオの活

用状況について調査するとともに、ポートフォリオの内容と様式を検討した。省察を促す授業を実践し、履修者に紙によるティーチング・ポートフォリオの作成、自己・相互評価をしてもらった。2年目は、省察を促す授業を継続し、電子ティーチング・ポートフォリオの作成と電子掲示板の活用を行った。また、1, 2年目のポートフォリオの利用状況と授業効果を質的に比較した。3年目は、2年目の実践・研究を踏まえ、電子ティーチング・ポートフォリオの問題点を改善するために履修者、他大学の英語科教職科目担当者、現職教員からフィードバックをもらった上で、2年目の実践を改善・継続するとともに、データの分析を行うことで、省察を核にした教職プログラムの意義と教師の成長について明らかにした。

(2) 量的・質的分析方法

ここでは、電子掲示板の分析に使用した方法を示す。量的分析として、データマイニングを用い、1年分全履修者の電子掲示板の文字データ(1051の書きこみ)を単語頻度解析、係受け頻度解析、特徴語抽出することで、履修者の学びの特徴を明らかにした。

質的研究においては、1週分のデータに焦点を当て、詳細な分析を行った。分析対象は履修者が、毎週投稿した掲示板の振り返りのうち、前期授業の9回目に投稿された記述58名分(男子19名、女子39名)であった。分析方法としてGendlinら(Gendlin & Hendricks, 2004)が開発した理論構築法Thinking at the Edge (TAE)(近年、得丸(2010)が質的研究法へ応用)を用いた。分析過程は、大きく分けて「フェルトセンスから語る」(ステップ1~5)、「実例からパターンを引き出す」(ステップ6~8)、「理論を形成する」(ステップ10~14)の3部で構成されている。分析にあたり、掲示板に書かれた記述を印刷し、何度も読みこんだ。明確に言語化できないが漠然と身体的に感じられる感覚を言語化した。

4. 研究成果

(1) 量的研究結果

量的研究結果として以下のことが明らかになった。単語頻度分析において、上位頻出名詞は、「授業、生徒、教師、英語、重要性、私、必要性、文法」であった。また、上位頻出動詞は、「学ぶ、考える、する、使う、感じる、持つ、聞く、思う」であった。上位頻出形容詞は、「良い、多い、難しい、面白い、上手い、高い」であった。頻出語が含まれる記述に着目して、記述内容をさらに分析したところ、講義で学んだ理論や教授技術について言及し、それらに対する気持ちや考えを述べる記述が多いことが分かった。また、理論や教授技術に照らし合わせながら、過去の学習経験を振り返るとともに、実習生として教壇に立ったときに、できることをイメージし

ていることが分かった。

(2) 質的研究結果

質的研究結果として、以下のことが明らかになった。ステップ 1~5 の手順を踏んで得られたマイセンテンスは、「自分がなれそうな教師像の具体例をイメージする」であった。次に、ステップ 6~9 において、データから多様な側面を選び出し、パターンとして言い表すとともに、各パターンを相互に交差させ、データから新たに浮かび上がってくる知見を書きとめた。得られたパターンと交差の例を以下に示す。

表 1：得られたパターン (Step 6, 7)

パターン 1：中高の授業は訳読中心でつまらなかった。
パターン 2：背景知識がないため、英文を読めない経験があった。
パターン 3：中高の授業で、プレ・リーディング指導はほとんどなかった。
パターン 4：英文を読む前の背景知識（内容スキーマ）の活性化が内容理解を促進することを実感した。
パターン 5：読む前に、題材について生徒の興味・関心を喚起することが重要である。
パターン 6：授業前の教師の十分な教材研究と準備が重要である。
パターン 7：3 段階の指導手順を意識しながらリーディングの授業を組み立てたい。
パターン 8：様々な指導法を知り、訳読だけではない授業の工夫をしたい。

表 2：交差の例(P1) (Step 8)

P1×2：英文を訳せることが、英文内容を理解することにはならない。
P1×3：訳読中心の授業では、読む前に題材内容の指導をする必然性はない。
P1×4：訳読授業がつまらないのは、英文の背景知識がなく内容が分からないからだ。
P1×5：訳読授業がつまらないのは、題材に興味をもてないからだ。
P1×6：訳読中心の授業は、教師にとって指導が簡単だ。
P1×7：訳読中心の授業がつまらないのは、授業に流れがなく、変化がつけられないからだ。
P1×8：訳読授業がつまらないのは、一つの指導法だけで授業が単調になるからである。

その後、ステップ 10~14 において、分析者が保持しているフェルトセンスで用語を選出し、概念を形成していった。理論の骨格は以下のとおりである。履修生は、掲示板でふりかえりを書く際に、過去の自分の学習経験のふりかえりをまず行う。その際、現在の授業で学んでいる理論に関連する経験を探す。対応する経験が見つかったら、過去の授業の課題を分析し、授業で学んだ現在の理論に基づいて問題点を説明することで、経験の理由づけを行う。経験のふりかえりは、授業で学んだ理論を各自が取り込むために、必要

な第一段階である。経験のふりかえりをし、経験の理由づけをする過程で、過去の経験と授業で学んだ理論をいったりきたりする。学習者としての経験のふりかえりをし、経験の理由づけができれば、理論を取り込むことになる。理論を取り込むことができれば、具体的な教えるイメージを浮かべることができる。これは、自分が教師だったら（具体的には教育実習で教壇にたったら）、何ができるか考えることである。具体的な教えるイメージは過去の学習者としての自分と未来の教師としての自分のイメージを「いったりきたり」することで浮かんでくる。教師の卵として、学習者と教師の視点を持ち、これら一連の作業を毎時間繰り返し行っていくことで、受講生は等身大の自分なりの教師像を固めていき、教師の卵として成長していくと考えられる。

(3) 研究成果の意義

教職履修生にとって、専門性の向上のために、「行為のための省察 (reflection for action)」は意味があり、経験の少ない教師には、計画を述べたり、結果を予測したり、将来の実践について省察したりする機会を与える必要がある。本研究結果から、オンライン掲示板とティーチング・ポートフォリオは、受講生の絶え間ない省察を促し、教師としての成長に寄与することが明らかになった。したがって、省察を核としたプログラムの意義は十分に認められる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

高木亜希子、粕谷恭子(2013). 小学校外国語活動における教師の働きかけ、『青山学院大学教育人間科学部紀要』、査読有、pp.119-132

Takagi, A. (2012). An exploratory study of four Japanese teachers' beliefs about teaching reading in public high school. *Hwa Kang English Journal* (Chinese Culture University), 査読有, 18, pp.73-101.

〔学会発表〕(計 5 件)

Takagi, A., & Ito, T. (2013). What does reflection mean for pre-service teachers?: Analysis from online weekly journals. Joint 7th Biennial Conference and ERAS Conference 2013 (2013 年 9 月 10 日・Nanyang Girls' High School)

Takagi, A. (2013). How should we use the Japanese Portfolio for Student Teachers of Languages?: Suggestions from the second annual survey. JACET2013 (2013 年 8 月 30 日・京都大学)

高木亜希子(2013). 「教職履修生にとって授業を振り返る意味とは何か」語学教育エキスポ 2013 (2013年3月17日・早稲田大学)

Takagi, A. (2012). Japanese pre-service teachers' perceptions of teaching and learning through metaphor analysis. *The 29th International Conference on Language Teaching and Learning in ROC.* (2012年5月19日・Chinese Culture University)

Takagi, A. (2011). Promoting reflection of pre-service teachers in a teaching methodology course. *ERAS 2011 Conference* (2011年9月9日・Raffles Institution)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高木 亜希子 (TAKAGI, Akiko)

青山学院大学・教育人間科学部・准教授

研究者番号：5034629